

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

インド史跡調査団 —アジア写真資料集成データベース

深見 奈緒子

一括出土コインの調査(新疆出土のサーサーン式銀貨)

津村 眞輝子



バラール・グンバド(デリー、M. 35)の前で器材を広げる東京大学インド史跡調査団
左端が荒松雄副団長、右から3人目が撮影担当の三枝朝四郎氏。1959年に山本達郎団長が撮影。

インド史跡調査団 アジア写真資料集成データベース

深見 奈緒子

はじめに さかのぼること半世紀、東京大学インド史跡調査団は、山本達郎団長、荒松雄副団長のもと、月輪時房、三枝朝四郎、大島太市の諸氏から構成された。当時、建造物調査には最新鋭であった写真測量機器をインドへと運び入れ、二回（1959～60年、1961～62年）延べ9カ月に及び現地調査が挙行された。調査団の目的は、デリーに遺存するスルタナット期（13世紀初頭～16世紀中葉）に造営された建造物遺構の調査であった。

この時代、トルコ系、アフガン系のムスリム支配者が、相次いで新天地インドへと押し寄せた。デリーを拠点にインド亜大陸において異民族の支配とともにイスラム教が広まり、モスクや墓建築など石材を用いた剛健な建造物が数多く建設された。建築史からいえば、インド亜大陸に既存の伝統的建築文化に、中央アジアや西アジアから上記のような新たな用途の建築や、アーチやドームなど新たな技法などが導入され、スルタナット期300年余りの期間をかけて、新たな技法や様式が、インドの建築文化に消化吸収された。インド史跡調査団が舞台として選んだデリーは、「デリーの七都市」とうたわれるように、南北30キロメートル、東西20キロメートルにも及び、東京23区にも匹敵する広さである。加えてベンガル地方、デカン地方、グジャラート地方等、地方ムスリム王朝の重要建造物の調査がおこなわれた。

この調査の写真資料他をデジタル化し、公開したのがデータベースである。1999年から資料のリスト化とデジタル化を始め、2001年には試験的に公開を始めた。それ以来、膨大なフィルムについて順次デジタル化と更新を進め、2007年度には新たな機能を盛り込んでリニューアルを果たした。ここでは、公開資料の性格をまとめ、それに対する制作側の意図と使用法の一例を紹介したい。

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/islamarc/index.html>

資料の性格 本調査団の本来の目的は、『デリー デリー諸王朝時代の建造物の研究 第1巻 遺構総目録』（1967年、山本達郎、荒松雄、月輪時房著、東京大学東洋文化研究所）、『同 第2巻 墓建築』（1969年）、『同 第3巻 水利施設』（1970年）に著されるように、デリーに遺存するデリー諸王朝時代（スルタナット期ともいう1191年から1526年）の諸遺構について、現地調査を基盤とした歴史研究であった。したがって、遺構目録としての『デリー 第1巻』に収録されたモスク61件、墓地72件、墓建築142件、水利施設52件、その他58件、計385件が調査の中核を占める。広大なデリー圏において時代と建物用途を絞り、悉皆的にくまなく踏査が行われた。時代を限っているとはいえ、網羅的調査である側面はデータベースとして相応しい。加えて、都

市化の激しいデリーでは、今は失われてしまった建造物も数多く、50年前のデリーをとらえるためにも貴重な資料である。

中でも、『デリー 第2巻 墓建築』に収録された13棟、『デリー 第3巻 水利施設』に収録された10棟、未完の『デリー 第4巻 モスク』に収録される予定であった24棟は、数多くの前出踏査遺構の中から、インド史跡調査団が、歴史的なメルクマールとの判断を下したものである。数多くの写真が撮影され、図面や拓本も残され、建造物の様相が手に取るようにわかる。

一方で、これらデリー諸王朝時代の建造物の位置づけを行うために、ベンガル地方、デカン地方、グジャラート地方等で、地方王朝の建造物に関する踏査が行われた。地方の建造物に関しては、当時すでにインド考古学局からいくつかの報告書は出版されており、その中から代表的な遺構を選んで、写真撮影を主とする調査が行われた。それゆえ、完全な網羅性は望めないが、主要建造物の写真が大型カメラで克明に撮影されており、貴重な資料といえる。

この他にも、調査中の人物写真、地方への探査旅行の際の風景風物、著名なヒन्दゥー遺跡の写真等も所蔵資料には含まれている。しかしながら、インド・イスラム史跡としての公開という点から本データベースには収録しなかった。一方、デリーの悉皆調査の際にインド調査団が1526年以後のムガル朝時代の建造物として位置付けたイスラム建築に関しては、後述する「デリーのイスラム史跡：建物種類・時代・地図からの検索」に収録した。

このように、インド史跡調査団のインド・イスラム写真のデータベースではあるが、資料には地域的時代的ばらつきがあり、加えてかなりの粗密、ひとつの物件に対して1枚しか写真がないものから、1000枚を超える写真が撮影されたものもある。

操作の方法 上記のアドレスにアクセスすると、最初の画面に「インドの地図」、「ドームのかかった写真」、「スケール入りの図面」が表示される（図1）。それぞれ、「地方の建造物の写真一覧とその紹介」、「デリーでの踏査建造物の写真一覧」、「デリーでの重要建造物の図面等の一覧」のデータ開示を目的とした独立するものなので、ひとつずつ説明していこう。なお、後二者は、2007年のリニューアルに際して新設した部分である。

インド・イスラム史跡 インドの地図には、インド史跡調査団の調査都市を書き込んだ。地方での調査写真データの一覧を目標とするとともに、それぞれの建造物の解説の提供をめざした。1999年秋からはじめた一連の写真資料の



<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/islamarc/index.html>

図1 インド史跡調査団

整理にともなって最初に作成した個所である。インド各地の写真を、都市ごと、建造物ごと、建造物の部分ごとに段階的に分けて表示するようにした。

表紙の写真の横に、6つの見出しを付けた（図2）。最初の「所蔵写真資料の公開にあたって」では、資料の中味と整理方法をまとめた。次の「インド・イスラム建築とは」では、インド亜大陸におけるムスリムの建造物に関する歴史の概略を述べ、さらに年代別や地方別の特徴、および用語の解説を加えた。3番目の「紹介する都市の一覧」では、デリー以外の都市にあるイスラム建築写真を、都市 建物 部屋あるいは部位という段階で収録したページである。2003年岩波書店から刊行された荒松雄著『中世インドのイスラム遺蹟 探査の記録』に収録された遺蹟とほぼ対応しており、物件の説明は、本著から引用した。4番目の「写真内容の一覧」では縦軸に都市名、横軸に建造物の機能をとって物件数を示すとともに、縦軸からはそれぞれの都市へ、横軸からはそれぞれの施設別の一覧ページへとリンクを張ってある。5番目の「Delhiイスラム史跡検索ページ」は、2005年に新設したページである。上述のように主題であったデリーの建造物の写真が多いので、年代、建物の機能、地図から検索できるように試みた。ただし、ここに収録した写真は、大型カメラで撮影されたものだけにとどめた。最後の「ENGLISH PAGE」は、「インド・イスラム史跡」全体の英訳である。

デリーの中世イスラム史跡：建物種類・時代・地図からの検索 表紙には3つの検索ボタンが表示され、「建物種類から」、「時代から」、「地図から」デリーのイスラム史跡にアクセスすることができる（図3）。ちなみに、ドームのかかった写真は、14世紀初頭に生きたデリーで最も著名なムスリム聖者ニザーム・ウッディン・オーリヤーの廟で、



<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/islamarc/WebPage1/hm/index.shtml>

図2 インド・イスラム史跡



<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/islamarc/delhiphotosearch/index.html>

図3 デリーの中世イスラム史跡/建物種類・時代・地図からの検索

隣に見えるのは、14世紀初頭に建立をさかのぼる赤砂岩造のジャマート・ハーナ・モスクである。

建物種類へと入れれば、『デリー第1巻』の分類に従って、モスク、墓地、墓建築、水利施設、その他の表示があり、それぞれへと進むことができる。建物種類を指定すると、4つの時代区分の下に、物件が並んでいる。逆に時代からアクセスすれば、それぞれの建物種類が列となって現れる。地図から検索する場合には、地図の下にある「詳しく地図を見る」へと進んでほしい。そうすれば、地図に書かれた番号が解読できるまで拡大が可能となる。

先ほどの表紙の写真、ジャマート・ハーナ・モスクは、インド史跡調査団がサルタナット前期（1191～1319年）と位置付けるモスクで、『デリー第1巻』にM02として収録されている。建物種類のモスク、あるいは時代の前期からM02をクリックすれば、写真下の「他の画像を見る」でM02に関する写真一覧に到達し、あわせて『デリー第1巻』

ら、この一括出土資料は1959年に発見されて以来、直後に8枚の拓本が公表されたのみで未調査であった。そこで、筆者は無謀にもシルクロード学研究所に助成金を申請し、この一括コインの全点調査を、所蔵先である新疆ウイグル自治区博物館と日本の研究者（菅谷文則氏、森本公誠氏、山内和也氏と筆者）との共同調査として実施することとした。

大学や博物館に勤務する日本側メンバーが、多忙な日程の中でとれる現地調査期間は限られていた。1998年3月、実に1週間弱のスケジュールであった。

とにかく約1000枚である。事前に作ったA4のデータ記入カードも1000枚となればしりしりと重い。当時はまだデジタルカメラが普及しなかったため、スライドフィルムだけでもかなりの量となった。

現地では新疆ウイグル自治区博物館研究員と協力しながら、それぞれが役割分担をして、写真撮影、重量・寸法（径、厚さ）計測、コインの向き（表と裏の型の方向）、図柄や銘文解読などを行った。細かい観察は顕微鏡を使用した。コインには表と裏があるので写真は各2枚必要であり、観察も2倍の時間がかかる。コイン1000枚分の調査は、資料2000点分の調査というわけだ。次々とコインをリレー式に渡しながら、各自が黙々と作業を進めた。また、一緒に発見された金条の調査観察や、李遇春氏ご本人を菅谷氏が訪問しての発見当時の聞き取りなども実施した。

これらの基本データを日本に持ち帰り、ここからが本当の意味での調査作業となった。計測データをデータベースソフトに入力する一方、パフラヴィー語の専門家山内氏と筆者とで現地で記入してきた銘文や図柄を、一枚一枚、再確認していく。スライドで撮影した写真をCDに焼き、パソコン画面上で拡大しての作業であった。写真はカラーで撮影したが、銘文を読むには意外とモノクロのほうが見や

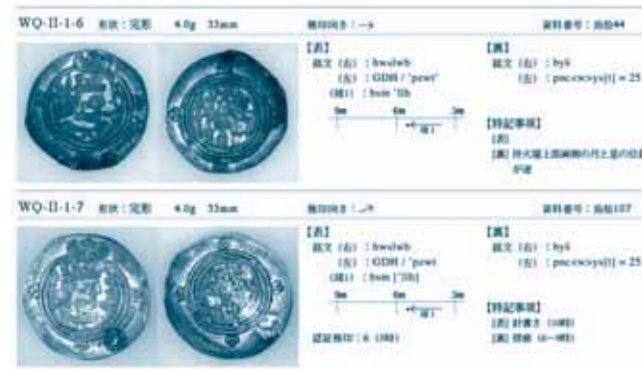


図1 ササーン式銀貨（初期イスラーム時代にサーサーン朝ペルシアのフスラウ2世銀貨を模倣して発行された銀貨）

下のコインには表に針書き、カウンターマークがあり、裏には捺痕がつけられている。

「シルクロード学研究所」239頁部分

すかったりもする。集中力が必要とされたが、博物館に勤務している筆者は日中その時間がとれず、作業が夜中になることもあった。目をつぶるとコインがまぶたの裏に見える、そんな毎日である。

一枚一枚のコインから、我々が持てる力で情報を絞り出す。それをもとに、全点のコインを発行者、発行地、発行年順に分類して番号を振った。銘文の読みを見直し、通し番号を振り直すこともある。こういう時の並べかえは、やはりアナログのカードが一番であるが、一気にデータを更新したり、統計をとるのは市販のデータソフトの威力が発揮された。今後も一括コインの調査はデータソフトなしではできないと思う。

貴重な一括コインのデータを早く公表し、コイン研究に役立てたい。そう思う気持ちはいっぱいでも、なかなか進まない。調査中に知り得た情報は全て公開しようというのが目標であったが、いかんせん情報が多すぎ。この一括コインの調査中は、若干おかげさといえれば休日返上の生活であったが、私事ながら途中体調を崩して休職したこともあり、ようやく報告書が発刊されたのは2004年のことである。写真を全点掲載しなければ意味がないとして、編集・レイアウトすべてを自分たちの手で行うことにしたことも、作業量の膨大さに拍車をかけた。コインを実物大に掲載するべく写真をトリミングする、そんな作業も延々としなければいけないのだから。気長に待ってくれたシルクロード学研究所には本当に感謝している。

こうしてようやくこの一括出土コインの全貌を公開する報告書が発刊された（注2）。もっと多くの方が利用できるようにするためにどうしたらいいか、といった課題は山積だが、一つの責務は果たせた。

当然ながら未調査の一括資料を調査したことで、新たに判明したことが数多くある。ここでは特に興味深い点を中心に、この一括コインを紹介しよう。

コインは全て、サーサーン式銀貨、すなわちサーサーン朝ペルシアが発行した銀貨とその型式を模倣して初期イスラーム時代に発行された銀貨であった。全てが1ドラクマという単位のコインである。

総枚数は918枚である。といっても、コインは割れているものが多く、今後接合作業などが進めば枚数もかわろう。完全に一枚の形で残っているものは771枚、一部が欠損しているもの117枚、破片30枚であった。総重量は3510.2g。ドラクマ銀貨1枚の重量（3.8～4.2g）で割ると835～923枚ということになる。

コインには発行年数の銘が記されており、いつ発行されたかまでわかる。年代を決定できる最も古いコインはサー

サーン朝ペルシアのオフルマズド4世発行の年数10である。つまり、王銘などからオフルマズド4世発行とわかり、裏に10を示す文字銘があるコインだ。この数字は、現在の日本のコインに記されている「平成19年」と同じで、王が即位して10年めを示す。西暦に換算すると588年である。一方、最も新しいコインはウマイヤ朝総督ウバイドラー・ブン・ズィヤード発行の年数60のコイン。初期イスラーム時代のコインの紀年はヒジュラ歴かどうかなど諸問題はあるものの、このコインについては西暦で679年とした。つまり、この一括コインは、確実にわかる年数だけからいうと、588年から679年までのコインを含んでいることがわかった。

図柄は、表に男性の横顔、裏にゾロアスター教の拝火壇と両脇の人物があらわされている。一見どれも同じだが、細かい部分で一枚一枚異なる。首飾りや耳飾りの玉の数、拝火壇の壇の数、人物の手の位置などなど。約3cmのコインの中だから、かなりマニアックな世界だが、コイン研究にはこの違いが大事である。

逆に一度に何枚もみていると、まったく同じ図柄のコインを発見することもある。西アジアのコインは表裏二つの型に金属を挟んで打刻するので、同じ型で作られたコインは何百枚単位で世の中に送り出される。とはいえ、あちこち流通すればするほど、ひとつの「財布」で再会する可能性は少なくなっていく。しかし、やはりこれだけの枚数ともなると、あるものである。「あ、この図柄さっき見た」と特殊加工した画像をパソコン上で重ねるとびたりと重なる。表裏同型のコインは5組あった。指紋探知機を使えばもっと容易だろうと思っただけ、これは今後の課題だ。

そのほか特記事項として、墨でコインに文字や記号が記された「墨書」が128枚、鋭利な器具で文字や記号がつけられた「針書き」が71枚、小さな刻印が後刻された「カウンターマーク」が210枚認められた。いずれもサーサーン式銀貨にときおり認められるものだが、このようにまとまっている例はない。墨書などはごしごし洗浄すると落ちてしまうが、そのような処理がされていないことが幸いであった。

また、幅約3～5mmのひっかけ傷があるものが82枚ある。捺痕と名付けたこの傷は、ある種類のカウンターマークと深い因果関係があることが統計から証明できた。カウンターマークを刻印する前に、コインの銀質を確かめるべく傷をつけたのでは、と筆者は推測している。このように、大量一括出土なるがゆえに、さまざまな要素をいろいろな角度から統計分析することができる。

ところで、針書きや捺痕のような「傷」は、これが出土品でなければ無視せざるをえない。いつつけられたのかもわからない傷を、情報として扱うことはできないからだ。

しかし、出土品という確かな経歴を持つこと、一括品の中にかかなりの割合で確認できること、などの好条件が重なって、はじめて傷も立派な情報として扱うことができる。

さて、一括出土コインは、誰がどのような目的でコインをそんなにまとめて、その地に埋めた（放置した）のか？という想像するのが楽しい。

よくあるのは、壺や箱などに入って建物の床下などから発見されるケースである。大切な財宝かへそくりか。今でいうコイン愛好家が宝物として集めたようなものもある。なかには、同時期に流通していたとは思えないコインがまとまって出てくることもある。たとえば、陝西省何家村の貴族の邸宅址から出土した陶甕の中には、サーサーン銀貨、春秋時代、漢時代の青銅貨、日本の和銅開珎、東ローマ金貨など、さまざまな時代地域のコインが納められていた。

この新疆ウチャ出土の一括コインはどうだろう。発見当時、コインを入れていたような容器はなかった。コインには繊維が付着しているものがあったが、包んでいた布かもしれない。街道沿いの岩陰という出土地点も興味深い。なぜそこに隠すように置かなければならなかったのか？古くからの小道であったという発見地は中央アジアとカシュガルを結ぶ地にある。李氏は報告書で「唐代に東西交易路を行き来する商人が強盗に会い、所持していた金条と銀貨を路傍に隠したが、取りに来る前に殺害された」と推測している。900枚もの銀貨と13本の金条を持ちながら、それを手離し、二度と取りにこれなかった人物。盗賊にあったのか、何かの戦いに巻き込まれたのか。ドラマである。さぞや無念であったろうが、そのおかげで今私たちに多くの情報を伝えてくれている。こんな形で報われていますよ、とコインを調査しながら感謝する。

コインが放置された時期については、遺跡からの出土でもないし、一緒に出土した土器などもないため、コイン自体の情報に頼るしかない。679年発行のコインがあるので、それより後であることは確かである。運搬中に一時的に隠されたものであれば、当時の流通貨幣そのものとも考えられる。そこには8世紀以降のコインが含まれていないことから、7世紀後半であろうか。サーサーン朝ペルシアが滅んで間もない初期イスラーム時代である。といいながら、この一括コインにはサーサーン朝ペルシアのコインが6割以上ある。うちほとんど（546枚）がサーサーン朝ペルシアの王フスラウ2世（在位590-628年）発行のコイン。そんなことから、信用度の高いフスラウ2世のコインが長い期間出回っていたということも伺いしることができる。

…と語り出したらきりが無いほど、いろいろな情報が出て盛り。これが一括出土コインの醍醐味である。これほど貴重な資料を調査できたのは数多くの機関・人々のおかげ

に収録された紹介文を読むことができる。写真の配列は、どの物件についても、外観、内観、細部と並ぶよう心がけた。写真横に、ファサードや全景などの写真種類や建物の部分および撮影方向（東西南北）を記載するようにした。写真のM02に関して言えば、40枚の写真を所蔵していることがわかり、それぞれの写真下のJPEGで大きな画像へと到達し、iPalletではさらに拡大画像を見ることが可能である。たとえば、M02の14番目のミフラーブの写真のiPalletボタンをクリックすれば、ミフラーブの周りのインスクリプションも判読できる。

また、M02の「同じ地域の建造物を探す」で、M02の所在地である地図上のI-9へと進めば、ニザーム・ウッディン・オーリヤーのダルガー近傍の建造物を一覧できる。下の方へたどればASI-2-197が、表紙の写真の手前に写る葱花型のドームを戴くニザーム・ウッディンの墓であることがわかる。実はこの墓は、1325年彼の没後、いく度となく修復を重ね、現在のドームは1823-4年に建立されたもので、インド調査団の対象物件にはなっていない。

本踏査の基盤となったのは、1916年から1920年にインド考古調査局によって出版された『Delhi Province. List of Muhammadan and Hindu Monuments. Vol. - .』であり、I-9の一覧に数多く並ぶASIの番号はその収録番号をあらわす。なお、IOCの番号は、インド史跡調査団の2度の調査で発見したもので、同著に記述のないものである。当番号はインド史跡調査団が最初に地区別に資料整理をした時に付した番号である。『デリー第1巻』に収録された385件の対象物件に関しては、記述の最後に当該ASI、IOC番号が記されている。I-9の一覧の最後に位置するRICASの番号は、今回の写真整理の過程で、上記以外のもので写真から歴史的遺構として判別できたもので、総数109件に及ぶ。

デリーの中世イスラーム史跡：図面・拓本・地図集成 インド史跡調査団は、実測図や、当時としては最新鋭のステレオカメラを導入して、詳細な図面を数多く残している。その対象となったのは、前述したようにインド史跡調査団によって選ばれた建造物である。収録した物件は、このページの下部にある「デリーの中世イスラーム史跡：図面・拓本・地図集成とは」に示すように、モスク34件、墓建築13件、水利施設12件である（図4）。現在は未完で、100点の図面を公開しているだけだが、2007年度に図面、拓本資料のデジタル化を済ませ、順次公開の予定である。ちなみに先ほどから話題のM02には、平面図が掲載されている。この図と先述したM02の写真一覧のページを同時に開けば、写真撮影位置がよりわかりやすくなり、建物を立体的にとらえることが可能となる。



http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/islamarc/delhi-monuments/index.html
図4 デリーの中世イスラーム史跡/図面・拓本・地図集成

図面に関しては、出版用に墨入れして製版された図面だけでなく、現地での鉛筆書きの原図や、立体カメラ図化途中段階の諸図面もすべて収録した。たとえば、所蔵一覧の2ページ目一行4列目M04の立面図をクリックすると、図面の上方に「詳細画像：Lime」という表示があらわれる。ここをクリックすれば、この図面が立体カメラ4枚の乾板を用いて昭和38年6月4日に図化されたことがわかる。また2行3列目の同配置図に対して「Lime」を用いて拡大すれば、この図面は現地での平板測量図面であることが判明する。

図面の検索方法は、「所蔵一覧表から」では、「デリー第1巻」の掲載順に小さな画像が並んでいる。また、「建築の種類から」も同様に、モスク、墓建築、水利施設、インスクリプションの拓本、地図へと直接アクセスできる。

データベースの意義 データベースは単なる情報の蓄積ではなく、利用者が検索や抽出することを前提としなくてはならない。本データベースでは網羅的蓄積という点では、調査資料に限られているために、まだ未整備な点は否めないものの、ほぼ完成の域に近づくことができた。しかしながら、情報の検索や抽出の自在さという点では、利用の方法をある程度規定してしまっている点があり、単なる図版資料の集成の域を超えることはできていない。特に検索に関しては、写真や図版というヴィジュアルな資料であるという枠が大きかった。一枚の写真には多種多様なデータが含まれているものの、現段階においては画像を文字化して検索せざるを得ず、文字化するためには何らかの分類の指標を設定せねばならない。インド史跡調査団が提示した機能別の建物種類、年代、地図上の位置という、3つの軸を踏襲するにとどめた。

後日談になるけれども、最初に紹介した「インド・イスラーム史跡」の中の「Delhiイスラーム史跡検索ページ」では、実験的に建物機能を宗教建築と世俗建築に分け、前者ではモスクを4つ、墓地を3つ、墓建築を17、その他を5

つ、後者では水利施設を8つ、その他を4つのカテゴリーに分けてみた。しかしながら、この分類に重要な意義を持たせえなかったし、決して使いやすいものにはならなかった。従って、新たに作成した「デリーの中世イスラーム史跡：建物種類・時代・地図からの検索」においては、初心にもどり、インド史跡調査団が提示した3つの軸を採用した経緯がある。データベースはそれを利用しようとする人の意図を汲みとり、様々な形があってよいはずだけれど、公開という点から考えれば、まず持てる資料を網羅的に提供すること、次いで多くの人が使いやすいことが重要ではないだろうかという視点に立脚した。

Googleの画像検索ページを利用したことがある人も多いだろう。固有名詞や所在地など限定的なキーワードにはうまく対応するけれど、建築をもう少し細かく分解した用語、

一括出土コインの調査（新疆出土のサーサーン式銀貨）

津村 眞輝子

コインは「小さな情報ディスク」といわれる。小さく平らな一枚ながら、そこに多くの情報がこめられているからである。

たとえば、サーサーン朝ペルシアが5~7世紀に発行した径3cmの銀貨には、表に帝王の肖像、称号と名前、裏に拝火壇、発行地略号と発行年数（在位年）などが記されている。それを読みとると、そのコインがいつどこで発行されたかだけでなく、当時の文字表記（パフラヴィー文字）、宗教（ゾロアスター教）、美術表現などのさまざまな情報をひきだすことができる。

もしそのコインが出土品であれば、出土地からコインの分布や流通範囲がわかり、出土状況からはコインがどのように扱われていたかを知ることができる。さらに、複数枚が一括で出土したのであれば、統計処理の母数が大きくなり、知り得る情報はさらに広がっていく。

したがって、「一括出土コイン」の調査研究は、きわめて地道な作業ではあるが、果てしなく有意義である。...と信じる筆者は中国新疆から出土した一括出土コインの調査に関わった。一括出土コインなるがゆえに大変な調査であったが、それなるがゆえに多くの情報を得ることができている。それを紹介したいと思う。

まず、筆者が調査した中国出土の約1000枚の一括出土コインについて、簡単に紹介しよう。

1959年、中国最西の県である克孜勒蘇柯爾克孜（クズル

たとえば柱、梁、アーチ、ドームなどをいれてもうまくヒットするものは少ない。建築関連の画像検索システムはまだまだ考慮せねばならないものであろう。

検索方法について、今後のブラッシュアップの方策としては、建造物の細部について有用な分類からインデックスを作成し、それぞれの写真の文字データとして付加し、検索に役立てる方法もあるだろう。また、「デリーの中世イスラーム史跡」の中で、「地図からの検索」で、それぞれの地点をグーグル・アースにリンクさせ、現在の様相を見られるようにするなどさまざまな可能性を秘めている。このデータベースを用いて、さまざまな方面からの、さらなる研究の深化を期待する。

（東京大学東洋文化研究所非常勤講師）

スキルギス）自治州ウチャ（烏恰/ウルグ）県の深い山中の街道沿いから900枚以上のサーサーン式銀貨が発見された。発見直後に現地へ行き、資料収集と現地調査にあたった当時新疆ウイグル博物館の李遇春研究員が、簡単な報告を記している（注1）。それによると、高さ90mの崖下での道路工事中に、岩の裂け目からコインが金条とともに発見された。布などに包まれていた可能性もあるがそれは残っておらず、コインは錆で塊になったものや破片が多かった。周囲には人工的な建造物は確認できなかった。

これを読んだだけでも、この一括コインの重要性がわかる。まず、中国という土地から西方のサーサーン朝ペルシア関連の資料が大量に出土したという点。中国の南北朝、隋、唐の時代には東西交流がさかんに行われ、その証として中国領内からガラス器、銀器などの西アジアの資料が数多く出土しているのはよく知られている。そのなかで数量としてはサーサーン式銀貨が最も多く、報告されているだけでも1600枚以上ある。その半数以上がこの一括資料である。東から西が「絹の道」ならば、西から東は「銀の道」だといわれる、まさにその証拠ともなりえる資料だ。数の多さも希有である。サーサーン式銀貨の1000枚単位の一括出土資料は、イラン国内を入れてもいまだ数点知られているのみなのである。

すなわち、中国出土の西方文物の研究にとっても、サーサーン式銀貨研究にとっても、この一括コインの全貌公開は不可欠である。しかし、これほど重要な資料でありなが

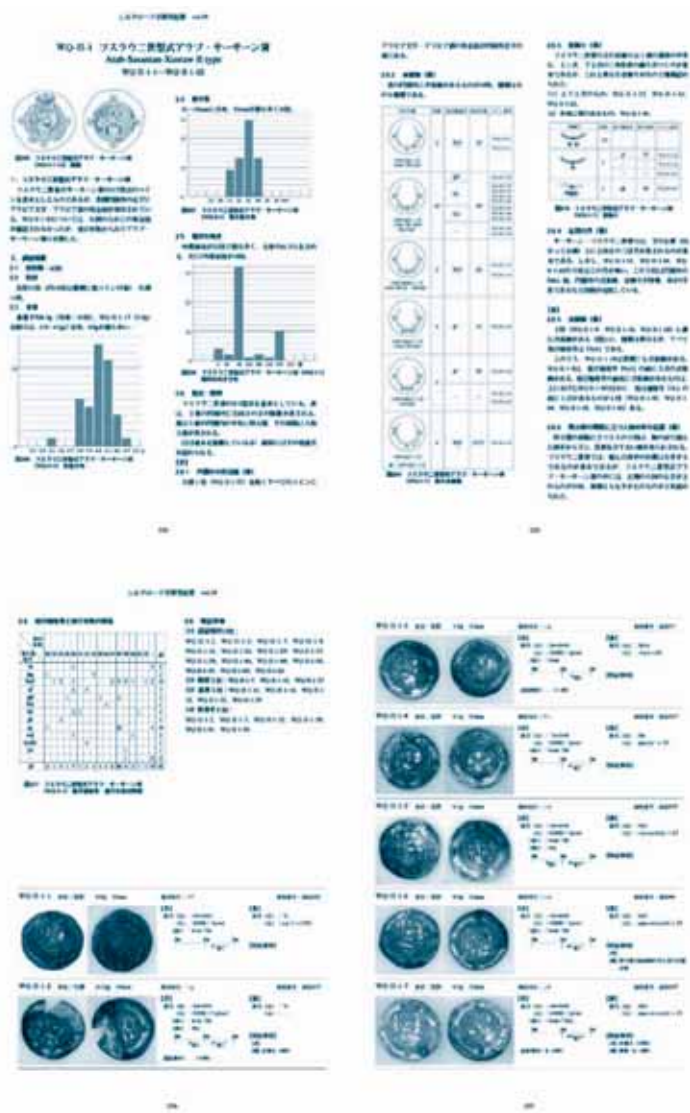


図2 「シルクロード学研究19」232-233頁、236-237頁

げである。そして調査した人間としては、さらなる詳細な分析をして発表していかねばという責務も感じている。もちろん、今の段階で正しいとしたことも、間違っていることが多々あるだろう。公表したデータを使って今後優秀な研究者がそれを訂正してくれればよい。どこかの誰かが一括でコインを残してくれた。それを、どこかの誰かがきちんとデータとしてまとめてくれた。それがとても役立っている、といわれれば本望。そんな気持ちで、今また世に出てない一括コインの調査をこつこつ進めている。いったん足をふみ入れたら、なかなか抜け出せないと思知はしているのだけれども。

注1) 李遇春「新疆烏恰県発現現金条和大批波斯銀幣」『考古』1959-9期(1959)482-483

注2) 『新疆出土のサーサーン式銀貨 新疆ウイグル自治区博物館蔵のサーサーン式銀貨』『シルクロード学研究19』2003

(古代オリエント博物館研究員)

センター便り

・後期主な活動

- 2007年12月13日 山上会館 アジア・バロメーター公開シンポジウム共催
- 2008年1月25日 一橋大学 全国文献・情報センター長会議参加
- 2008年3月12日 タイ・バンコク Fourth Meeting of Promotion of East Asian Studies ~ Network for East Asian Studies ~ 参加 参加国ASEAN + 3

東洋学研究情報センター運営委員会委員 (2007年度)

所外委員

- 西郷 和彦 附属図書館長
(大学院新領域創成科学研究科・教授)
- 平野 聡 大学院法学政治学研究所・
法学部准教授
- 川原 秀城 大学院人文社会系研究所・
文学部教授
- 泉田 洋一 大学院農学生命科学研究科・
農学部教授
- 國友 直人 大学院経済学研究所・
経済学部教授
- 村田雄二郎 大学院総合文化研究科・
教養学部教授
- 姜 尚中 大学院情報学環・
学際情報学府教授
- 丸川 知雄 社会科学研究所教授
- 保立 道久 史料編纂所教授

所内委員

- 鈴木 董 教授 西アジア研究部門、委員長
- 関本 照夫 教授 汎アジア研究部門、所長
- 田中 明彦 教授 汎アジア研究部門
- 安富 歩 准教授 東アジア研究部門(第一)
- 真鍋 祐子 准教授 東アジア研究部門(第一)
- 丘山 新 教授 東アジア研究部門(第二)
(兼)センター比較文献資料学
- 尾崎 文昭 教授 東アジア研究部門(第二)
- 永ノ尾信悟 教授 南アジア研究部門
- 樹屋 友子 教授 西アジア研究部門
(兼)センター造形資料学
- 玄 大松 准教授 センター比較文献資料学

センター長

- 小川 裕充 教授 センター造形資料学

センタースタッフ

- 小川 裕充(おがわ ひろみつ) センター長・
センター造形資料学分野教授 中国美術史
- 丘山 新(おかやま はじめ) センター比較文
献資料学分野教授 仏教思想
- 樹屋 友子(ますや ともこ) センター造形資料
学分野教授 イスラム美術史
- 玄 大松(Hyun, Daesong) センター比較文
献資料学分野准教授 国際政治学
- 保城 広至(ほしろ ひろゆき) センター造形資
料学分野助教 国際政治学

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第19号

- 発行日 2008年3月31日
- 編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
- 〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
- 電話 03-5841-5839(直通)
- FAX 03-5841-5898
- E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
- URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>

デザイン コスギ・ヤエ/印刷 (株)ヒライ